

## この町には、わたしの民がたくさんいる

アミール・ツアルファティ

- ギリシャのコリントからのメッセージ -

<https://youtu.be/AOQGJjQhkhg>

古代コリントからシャローム！

アテネから南に約50マイル(約80Km)、ペロポネソス島(南)とギリシャ本土(北)を結ぶ地峡から南に約2マイル(約3.2Km)の町です。私たちが今いるこのすばらしい町は、地理的には、さまざまなことから人々を楽しませてきた特殊な場所に位置します。しかし主なものは、その地峡の片側が、西はローマに面している点です。地峡の反対側は、実際に東、小アジア、エペソ、および他のすべての主要都市に面しています。そして基本的には、地峡の両側に2つの主要な港があったのです。片側で貨物が主船から荷下ろしされ、それが引きずられて、小さな舟であれば、舗装された道を引きずって行って、反対側の海に戻したのです。しかし大きな船の場合は、ひとつの船から荷下ろしして別の船に積み直すより他に方法はありませんでした。というわけで、ここは当時、古代世界の両側から貿易人たちを魅了した、2つの主要な港です。つまり、船員、ビジネスマン、旅行者たちを魅了し、そしてもちろん、この特定の町で、さまざまな神々を崇拝するために神殿を訪れる人たちを魅了しました。

私の後ろには、実際にアポロ神殿の遺跡があります。アポロは太陽の神、光の神、詩の神、そして知恵の神です。ゼウスの子は、12あるギリシャ神話の中で、最も重要な神の一つでした。いくつかの情報源では、彼はまた予言の神であったと言います。それについて私は考えていたのですが、パウロがこの地域に到着したとき、この特定の神殿は、すでに荒廃していました。だからパウロは、これを使って、それらの神々や物には、全く価値がないことを語ったのだと私は信じています。なぜなら、当時、巨大なアポロの黄金の彫刻が、あの中に立っていたのです。

コリントの町の名前は、“墮落”の同義語でした。それも、ただの墮落だけでなく、道徳の良識の完全な欠如です。私たちは、場所自体が非常に多くの人々を魅了したことを知っていますが、それは、間違った理由からでした。コリントでは4年ごとにイストミア大祭が開催され、アスリートやスポーツ愛好家たちを魅了していたことは別に、コリントはまた、女神アプロディーテー崇拝の名目で、人々を惹きつけていました。彼らは、アクロコリントスとして知られている、コリントの北部アクロポリスに旅して、彼らが訪れた神殿には、…よく聞いてください… 2000人の売春婦がいました。基本的には、すべての地域の人々に性行為を提供していた女性の売春婦です。そして、これらの女性たちに支払われた料金は、あの神殿で、女神アプロディーテーへの献金とされていました。言い換えれば、アプロディーテーの神殿に行き、そこの女性、売春婦と寝るというのは、多くの場合、宗教的な考え方だったのです。多くの人にとって、それは「我々は、アプロディーテーを崇拝しに来ている。私たちは、アプロディーテーの神殿に貢献するために来ているのだ」これでみなさんも理解できたでしょう。パウロが、コリントの人々に関する性的不道徳について書きたびに、彼は何を意味していたのか。第1コリント6章9節から20節と、第2コリント12章20節から21節の両方で、パウロは、淫行、売春、性的不道徳について、彼の時代に、この町で起こっていたことと完全に結びつけて語っています。そこで私たちが忘れてはならないのは、ギリシャ時代のコリントの名声は、実は、パウロの時代にはなかったことを覚えておく必要があります。パウロの時代、町は素晴らしかったのです。誤解しないでください。しかし、歴史をさかのぼると分かりますが、ギリシャがこの地域を支配していたとき、彼らが自分の帝国として、独立してここに住んでいたとき、コリントはとても重要だったのは、紀元前11世紀から5世紀の間でした。その時代にアポロ神殿が建設されたのです。そして、その時代、アポロの像がまだこの地域に立っていたのです。

コリントの町は、ローマ帝国に反抗したアカエア州の首都だったということは、私たちも知っています。そのためローマ皇帝は、この場所まで広がるとここを更地にして、紀元前1世紀に新しい都市を建てました。ですから、パウロがコリントに来たとき、そこは紀元前5、6、7世紀の有名なコリントではありませんでした。それは、まさに古代ギリ

シャがあった場所に立っているローマの都市でした。古代ギリシャが支配していた時代のものが、今日、ほんのわずかですが見られます。たとえばアポロ神殿。しかし、他の印象的なものは、ローマ時代のもので、市場のアゴラなどは、ローマ市内にあったものよりも大きくて、かなり目を見張ります。

今日の聖書の話は、使徒の働き18章です。パウロはアテネの町でしばらくの間説教をし、そして、そこを去ったことが分かっています。そこで起こっていた偶像礼拝に、彼がショックを受けたことも分かっています。彼がアテネの人々に「知られていない神」について話すことで、真の神のメッセージを伝えたことも分かっています。アテネは、言うならば古典的な哲学と詩の教えで知られていました。そこは、勉強に来ている人々が中心でした。アテネは、ちなみに、当時のローマの裕福な人々の大学でした。アテネが教育に関するものがすべてだったとすれば、コリントは快樂とお金がすべてでした。コリントは、ある意味、“俗世”を目の前に突きつけていたのです。

面白いことに、アテネで説教した後、使徒パウロはコリントへ行ったことが、第1コリント18章1節から18節に書かれています。私たちの知っている通り、ここはおそらく、アンテオケの後、パウロが訪問した最も重要な都市でした。たぶんエペソを除いて、私たちの知る他のどの都市よりも長く、彼はここに滞在しました。彼は18ヶ月間ここに滞在した、と聖書は告げています。これは、すごいことですよ。1年半です。パウロは、アキラとプリスキラの元に滞在しました。どちらも天幕職人で、実際、彼らはどこの出身でしたか？「ローマ。」聖書は、彼らがローマから逃げたと言います。ローマの歴史家スエトニウスによれば、皇帝クラウディウスが、西暦49年頃、ローマからユダヤ人を追放しています。ユダヤ人たちは、「キリストス」と呼ばれる教唆により、常に騒動の中にあつたためです。「キリスト」とも興味深い。コリントの黄金時代は、パウロが訪れるより5世紀も前でしたが、当時のコリントは、1世紀の間、その素晴らしい卓越した時代への復帰を楽しんだのです。しかし覚えておいてください。当時は、ローマの都市でした。

ここでは2年に一度のイスミアン大祭があり、この場所を多くの人々が訪れていました。オリンピックに次いで、2番目に重要な競技でした。ギリシャ語ではオリンピア。これが海の神であるポセイドンに敬意を表して開催されたことを、私たちは知っています。彼らはもちろん、海の側でこの大会が開催されたため、それに頼っていました。当時、競争が行われていた場所で、入場門のあった場所や物が、どんどん発見されています。私たちは、パウロが、これらの大会の一つに出席していた可能性がある、と信じています。パウロは、競争を走ることについて知っていましたから。パウロは、トラックを走ることについて知っていました。パウロはまた、最後まで走り終えたとき、勝者が得るものを知っていました。事実、これが興味深くて、ギリシャの情報源から私たちに分かっているのは、イスミアン大祭で勝者が受け取っていたのは、月桂冠の冠ではありませんでした。実際には、他でもなく、しおれたセロリでした。それが興味深い理由は、パウロは、人々が得る世俗的な冠を、「朽ちる冠」と呼んでいるのです。あれは朽ちる冠です。それは、第1コリント9章24節から27節にあります。

競技場で走る人たちはみな走っても、賞を受けるのは一人だけだということを、あなたがたは知らないのですか。ですから、あなたがたも賞を得られるように走りなさい。競技をする人は、あらゆることについて節制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。ですから、私は目標がはっきりしないような走り方はしません。空を打つような拳闘もしません。

むしろ、私は自分のからだを打ちたたいて服従させます。他の人に宣べ伝えておきながら、自分自身が失格者にならないようにするためです。（第1コリント9章24節から27節）

コリントには、非常に貴重なブロンズ作品を製造する軽工業もありました。それには磨かれた鏡も含まれ、たぶん、それが第1コリント13章12節と第2コリント3章18節が告げていることに光を当てるかもしれません。

今、私たちは、鏡にぼんやり映るものを見ていますがそのときには顔と顔を合わせて見ることになります。今、私は一部分しか知りませんが、そのときには、私が完全に知られているのと同じように、私も完全に知ることになります  
(第1コリント13章12節)

私たちはみな、覆いを取り除かれた顔に、鏡のように主の栄光を映しつつ、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられていきます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。  
(第2コリント3章18節)

さて、コリントは、私たちが知っているように、パウロが到着した場所です。そして、地峡の南にある場所の位置は、すばらしいものでした。歴史上、多くの人々が両側で船の荷物を積み下ろす労力を何とか軽くするために、運河を切り開くか、もしくは掘ろうと試みました。アレキサンダー大王やユリウス・カエサル、カリグラといった人物のすべてが、この地峡を通る運河を作ろうと考えたことも分かっています。そして、西暦67年、エルサレムとユダヤで、ユダヤ人の反乱が始まった直後、当時、おそらくパウロがこの場所を訪れてから約15年後、ネロが、運河の土地開拓式典で、鋤（すき）いっぱい土地を耕すために、コリントにきました。その時に彼は、いっしょにユダヤ人の奴隷を連れて来たことが分かっています。ユダヤ人の奴隷に運河を掘らせようと考えましたが、しかし、プロジェクト全体が放棄されました。信じ難いですが、今日見ている運河、有名なコリント運河は、フランスのエンジニアの監督の下、地元の人々によって、1881-1893年の間に掘られました。ですから町自体は、先ほど言ったように栄えていて、パウロの時代、そこは非常に重要な場所でした。

コリントには当時、どのような宗教があったでしょう？コリントでは、エジプト、ローマ、ギリシャのカルトと神々を見つけることができます。しかし、アフロディーテの神殿は、その山の頂上、私のすぐ後ろ、おそらくそれらのすべての上に立っていました。物理的、そして町での生き方の両方で。数千人のカルト売春婦は、下の町で自分たちの職業を続けたと言われていました。想像できるでしょう。神殿で起こっていたことが不道德だけでなく、不道德は町自体にあふれていました。それらの女性の多くは、実際に、帝国の他の部分から連れて来られた性奴隷だったことが分かっています。それから、イスミアン大祭の勝者の一人、一等賞を受賞した人が、基本的に、アフロディーテの神殿に200人の売春婦を提供したことも分かっています。女性はまるで、人の手から手へと渡る製品のようなものでした。そして美しい女性を見つけた人は、彼女を捕らえ、そこが最終地点になったのです。ですから、男性にとっては、コリントは最も美しい女性のいる場所として知られていました。もちろん、それは彼らの欲望を満たすための最も簡単な方法でした。ということでお分かりいただけたでしょうか。この文脈で、パウロは到着し、パウロはギリシア文化と偶像礼拝の文化について無知ではありませんでした。しかし、それでも彼にとっては、あまりにもひどかったのです。

では、使徒の働き18章を見て、この場所で起こったことを理解しましょう。

その後、パウロはアテネを去って、コリントへ行った。ここで、アクラというポント生まれのユダヤ人およびその妻プリスキラに出会った。クラウドオ帝が、すべてのユダヤ人をローマから退去させるように命令したため、近ごろイタリアから来ていたのである。パウロはふたりのところに行き、自分も同業者であったので、その家に住んでいっしょに仕事をした。彼らの職業は天幕作りであった。

パウロは安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人とギリシア人を承服させようとした。そして、シラスとテモテが、マケドニアから下って来ると、パウロはみことばを教えることに専念し、イエスがキリストであることを、ユダヤ人たちにはっきりと宣言した。しかし、彼らが反抗して暴言を吐いたので、パウロは着物を振り払って、「あなたがたの血は、あなたがたの頭上にふりかけ。私には責任がない。今から私は異邦人のほうに行く。」と言った。そして、そこを去って、神を敬うテオ・ユストという人の家に行った。その家は会堂の隣であった。会堂管理者クリスポは、一家をあげて主を信じた。また、多くのコリント人も聞いて信じ、バプテスマを受けた。

(使徒の働き18章1節から8節)



みなさん、これは反抗と受け入れの、非常に面白いミックスだと思うでしょう。シナゴグのトップに福音が受け入れられました。心に留めておいてください。私は何度も言っていますが、パウロの考え方は、「まず、ユダヤ人」彼は、イエシュア、イエス、メシアに関して彼が受け取った啓示は、まず、ユダヤ人に伝えなければならないと考えていたのです。そこで彼は、異教の世界の中心、人類の最も腐敗した側面を持つ土地に来て、それでも彼はユダヤ人のシナゴグに最初に行き、安息日に、数回、そこで説教しました。それはすべて、イエスが本当にメシアである理由を述べて彼らを説得し、説き伏せるためでした。それが非常に興味深い方法で、もちろん、多くの人が敵対しました。しかしシナゴグのトップと、その一家は、実際、それを受け入れたのです。そこで何が起こったのかを見てみましょう。

ある夜、主は幻によってパウロに、『恐れなくて、語り続けなさい。黙ってはいけない。わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから。』と言われた。(使徒の働き18章9節から10節)

わお！面白くないですか？パウロが到着した町は、宗教的であるか、または完全に不道德のどちらかで、この中間が、ほとんど何もなかったのです。パウロは、おそらく彼が考え得る中で、最も困難な宣教地に到着しました。想像できますか？ここにいた人たちは、自己の義を求めているか、もしくは、なんとか自分の肉の欲望を満たすことを求めているのです。そして、それはすべて、アフロディーテーで知られる女神を崇拝するという、宗教的ひょうごんばいな建前で行われました。考えてみてください。パウロはこの場所に到着し、彼はすでにアテネでの出来事で疲労困憊していました。彼はユダヤ人のシナゴグに行き、私が思うに…、パウロも人間です。そしてパウロは、大きな反抗を経験した場所に来ていました。ほとんど日常的に攻撃されるような場所に行くのは、簡単ではありません。ある時点で、私が思うに、パウロの肉的部分が言ったでしょう。「もう十分だ。私はここから出ていく。ここから出してくれ」私たちも、そんな状況に置かれることが何度もあるでしょう。まず第一に、ここは不潔な場所です。「ここには絶対に行かない」そうだとすれば、私たちは世界中のどこにいても福音を説くことができません。ただ第二に、多くの場合、私たちが考えます。「私はできることをすべてやった。もう十分だ！ここから出ていこう！」

でも面白くないですか？考えてみてください。ピーク時には何十万人もの人々がいた場所です。閉じ込められ、毎日見知らぬ人と寝ることを余儀なくされた、すべての女性について考えてみてください。その町に住んでいた不道德な人々について考えてみてください。ある人は、神は、そのすべてにうんざりしていると思うでしょう。他人に関しては、神が罪人を破壊し、邪悪なものを破壊することに喜びを感じているというイメージが常にあります。しかし、それは真実からほど遠くて、エゼキエル33章11節では、次のように述べています。

彼らにこう言え。『わたしは誓って言う。――神である主の御告げ。――わたしは決して悪者の死を喜ばない。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。かえって、悪者がその態度を悔い改めて、生きることを喜ぶ。悔い改めよ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ。なぜ、あなたがたは死のうとするのか。』

(エゼキエル33章11節)

これはイスラエルの民に言われたことです。しかし、私たちは、これがすべての人に対する神の御心であることを知っています。だれひとりとして死んだり、または滅ぶことなく、すべてが生きること。最終的には人の選択です。神を信じ、主の道を歩むのか、自分の罪深い性質を理解するのか、それとも拒否するのか。しかし神のみこころは、邪悪な人を殺すことではありません。神のみこころは、邪悪な者が立ち返り、悔い改めて、そして、生きることです。「命を選びなさい」モーセは、申命記の中で、主によって言いました。「きょう、…わたしは、いのちと死、祝福とのろいを、あなたの前に置く。あなたはいのちを選びなさい。…」(申命記30章19節)それが、神が人々に望んでいるものです。それは、神がまた、コリントの町にも望んでいたことです。「いのちを選ぶ」

そして、パウロは、ひどい一日を過ごしていました。「そうさ、分かっているよ。私は説教しなければならない。でも、今日は大変だったんだ」私たちも皆、大変な日がありますね？これから数分間は、パウロが何をしたのか、そして、

この町に対する神のみこころは何だったのかを見てゆきます。パウロが非常に大変な日を過ごしたことを、私たちは理解しています。そして彼は、何よりもまさって、心が高鳴るメッセージを神から聞いたことを私たちは理解しています。

「わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない」

実際に、ここに留まりなさい。なぜなら、あなたには理由があって、いつかの間ここにいます。

この町には、わたしの民がたくさんいる。(使徒の働き18章10節)

私思うに、パウロはひざまずいて祈り、神に尋ねていたに違いありません。「私はここに必要ですか？私のここでの仕事は終わりました。きっと私は退いた方が良いでしょう？」私たちは、大変な一日を過ごすと、おそらく心の中でこんなふうに思うのではないのでしょうか。そこで私は、詩篇145編を思い出しました。

主は倒れる者をみなささえ、かがんでいる者をみな起こされます。(詩篇145編14節)

それから続いて、後の方で告げています。

主はご自分のすべての道において正しく、またすべてのみわざにおいて恵み深い。…まことをもって主を呼び求める者すべてに主は近くあられる。(詩篇145編14節から18節)

私たちは神がそこにいて、パウロの気持ちを支え、励ましておられるのが分かります。パウロには、その励ましが必要でした。私たちはだれでも、その瞬間があります。みことばを説くときだけでなく、日常の生活においても。しかし、私たちが神の業をするときは、なおさらです。言っておきますが、もしあなたが神の業をすれば、いくつかの大きな反対に会うでしょう。私たちは、それを知っています。なぜなら、パウロがすでに第2コリント4章8節から9節で言っていますから。

私たちは、四方八方から苦しめられますが、窮することはありません。途方にくれていますが、行きづまることはありません。迫害されていますが、見捨てられることはありません。倒されますが、滅びません。

(第2コリント4章8節から9節)

彼は困難がある事を認めています。しかし、それは終わっていない、と。実際、彼は前進します。彼は先に進み、主ご自身から主の励ましを受けます。これは、とても重要です。みなさんが、今どこにいるのか私には分かりません。みなさんは、もしかしたら、こう考えているかもしれません。「私の家族は、みんな不道徳で、だれも福音など頭がない」「私の友人は、すっかり頭が汚染されていて…」みなさんが何を考えているのか、何に囲まれているのか、私には分かりません。しかし言えるのは、みなさんは、だれひとりとして、売春婦を探している大勢の船員に囲まれているに違いないでしょう。みなさんの中では、だれも“女神崇拜”の名の下、巨大な都市で、姓の奴隷になっている売春婦と寝ている人に囲まれているに違いないでしょう。ある人が、当時のコリントを「ステロイドを使用したアムステルダム」と表現しました。そして面白いことに、みなさん、理解しなければなりません。仮に、パリガルネッサンス文化と情熱の都だとすれば、ここは2000年前のまさにそれです。ここはアテネよりもずっとひどく、ローマよりもずっとひどかったのです。ローマは権力がすべてで、アテネは教育がすべてでした。ここは何がすべてでしたか？お金と快楽、主に肉欲の満足です。

みなさん、嫌でも理解するでしょうが、ここは、あらゆる“肉欲”が、最強の方法で暴露されている場所でした。しかし、私は信じています。あらゆる反対と、霊的な戦いの中でさえ、パウロは人間の声ではなく、神の声に耳を傾けなければならぬことを理解していました。私たちが次のことを理解しておくのは、非常に重要です。人が、私たちに最高のアドバイスを与えることは決してありません。ダビデがサウルから逃げ、エン・ゲディの洞窟に隠れていたと

きのことを思い出します。サウル王が、すぐそこで履き物を脱いで、足を水の中に入れていたのです。ダビデには、サウル王を殺す絶好のチャンスがありました。そして彼の民は、彼に言いました。

「主があなたに渡されたのです」  
「今だ！今日だ！これだ！やっしまえ！」

彼らは、「クリスチャン語」まで使いました。「主の御告げ」彼らは彼に言おうとしたのです。「これだ！」ダビデは、人の言葉に耳を貸しませんでした。たとえ彼らが彼の部下であっても。彼らは、彼に最も近い人たちで、彼らは彼の保護者であり、彼らはある意味で彼の警備員だったのです。ダビデは知っていました。聖霊に耳を傾けなければならないことを。そして彼は、決してサウル王には触れませんでした。彼は、何も間違いを犯しませんでした。

私の主君に手を下さまい。あの方は主に油注がれた方だから。（第1サムエル24章10節）

彼はそう言いました。だから神は、ダビデをとっても愛したのです。ダビデは他のだれかの意見に頼らず、彼は、神と聖霊に頼りました。そして彼はひざまずき、祈って、耳を傾けていたのです。神の御霊は、毎日ダビデと話しました。上がれ、下がれ、左に曲がれ、右に曲がれ。最も単純な実用的なものでさえ。ということで、パウロは、自分の寢床で考えていました。「私は、もうこの場所は終わった」神は言われます。「いや。まだだ」ちなみに、シナゴグでのちょっとした事件が困難だったとか、危険だったと思うなら、その直後に何が起こったのかを聞くまで、待ってください。その直後です。この話の直後、使徒18章では12節で次のように告げています。

ところが、ガリオがアカヤの地方総督であったとき…

これは、この場所の大きい領域です。

ユダヤ人たちはこぞってパウロに反抗し、彼を法廷に引いて行って…

法廷は、ここで見つかっています。コリントのさばきの座は、ここに 있습니다。我々はそれを見つけたのです。そして、その場所でパウロは、ガリオの目の前に連れて来られたのです。興味深いのは、彼らは彼をその場所に連れて来て…、

この人は、律法にそむいて神を拝むことを、人々に説き勧めています。』と訴えた。

（使徒の働き18章12節から13節）

面白くないですか？他のすべての神々が礼拝されることについては、彼らには問題はなかったのです。考えてみてください。仮にあなたが敬虔なユダヤ教徒なら、ちなみに、ユダヤ教は認められた宗教でした。そのためにローマが作った造語があるのです。「許された宗教」彼らが彼らの神を崇拝することを許していました。しかしユダヤ人は、ただの一度として他人のところに行って、言いませんでした。

「なあ、アフロディーテは存在しないよ」  
「おい、アポロは存在しない」  
「おい、神はおひとりだけだ」  
「あなたがたはみな、異教崇拝者だ」

いいえ。しかしそれが突然、どこからともなく、ある人がやって来ます。彼はユダヤ人。それが彼らのシナゴグに入ってきて、彼らの聖典を使って説教し、彼らは、すべて間違っていることを彼らに伝えます。

「救世主は来た」

「主はすでに来て、彼の名はイエス。イエシュア」

「彼は、神があなたがた全員に与えられた、すべての預言と、すべての約束を成就されました」

そのために、彼らは彼を連れて行ったのです。だれの前に？そのためにパウロは言ったのです。覚えていますか？「世俗的な力の前で、互いに起訴をしてはいけない」パウロは、私たち信者は自分たちの間で物事を解決する必要があると確信していたのです。しかし、ユダヤ人はパウロを連れて行き、裁判に立たせました。そして思い出してください。神が、彼に約束されました。

「心配するな、わたしはここにいる。あなたに悪いことは何も起こらない」

神があなたに何かを約束されたなら、あなたは、それに期待することができます。決定です。ということで、

パウロが口を開こうとすると、ガリオはユダヤ人に向かってこう言った。

パウロが話す前に、です。

「ユダヤ人の諸君。不正事件や悪質な犯罪のことであれば、私は当然、あなたがたの訴えを取り上げてもしょうが、あなたがたの、ことばや名称や律法に関する問題であるなら、自分たちで始末をつけるのがよかろう。私はそのようなことの裁判官にはなりたくない。」こうして、彼らを法廷から追い出した。そこで、みなのは、会堂管理者ソステネを捕らえ、法廷の前で打ちたたいた。ガリオは、そのようなことは少しも気にしなかった。パウロは、なお長らく滞在してから、兄弟たちに別れを告げて、シリアへ向けて出帆した。プリスキラとアクラも同行した。

(使徒の働き18章14節から18節)

つまり、神は、彼に言われました。

「心配するな。すべて大丈夫だ。この町には、わたしの民がたくさんいる」

そして、パウロは滞在することを決心し、約1年6ヶ月間、町に滞在したことが分かっています。そのすべての理由は？彼が神の声に耳を傾け、人の声には耳を傾けなかったからです。

あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。

自分を知恵のある者と思うな。

(箴言3編6節から7節)

それが、パウロが彼の心に持っていたメッセージです。私は、自分の知恵に頼る必要がない。神の知恵に頼らなければならない。

ということで、私たちは非常に重要なことを理解しています。邪悪な人でいっぱい、姦淫の罪を犯す人でいっぱい、売春婦であふれかえり、あらゆる種類の悪徳が満ちたこの町で、神は、パウロに言っています。

「パウロ、ここにいなさい。この町には、わたしの民がたくさんいる」

私は考えていたのですが、これは、まさに神の御心ではありませんか？この世にイエスを送られました。神は、全世界を愛しています。神が、あなたを愛するかどうかを決める前に、あなたが完全である必要はありません。

私たちは愛しています。神がまず私たちを愛してくださったからです。(第1ヨハネ4章19節)

逆ではありません。聖書は、第2ペテロ3章8節から9節で述べています。



しかし、愛する人たち。あなたがたは、この一事を見落としてはいけません。すなわち、主の御前では、一日は千年のようであり、千年は一日のようです。主は、ある人たちがおそいと思っているように、（私たちをここから取り去る）その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。

（第2ペテロ3章8節から9節）

「すべて」は全てを意味します。ヨハネ3章16節の有名な言葉は続きます。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。

（ヨハネ3章16節から17節）

パウロはさばきを説くためにこの町に来たのではなく、救いを説くためです。もちろん、あなたが救いのメッセージを拒否すれば、あなたは自分自身にさばきをもたらします。しかし、この人たちがそのメッセージを聞いたことがなければ、パウロが説教しなければならなかったのは、さばきについてではなく、救いについてです。神は、彼らを望んでいました。

御子を信じる者はさばかれない。信じない者は、神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれています。そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行いが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行いが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。しかし、真理を行なう者は、光のほうに来る。その行ないが神にあってなされたことが明らかにされるためである。

（ヨハネ3章18節から21節）

彼は、これらの人々に言おうとしたのです。

「悔い改めよ」  
 「神はあなたを愛しておられる」  
 「神は、ひとり子を送られた」  
 「彼はあなたを望み、彼はあなたを贖う事を望んでおられる」  
 「彼はあなたを救いたいのです」

神は、あなたのアテンション（関心）を求めておられます。パウロは、まさにここに滞在し、彼は知っていました。「私は、あえて伝えなければならない」「あえて、伝える」私が本当に愛することです。あなたには決してわかりません。ひとつ言わせてください。決してわかりません。あなたがだれかのところに行き、手を置いて、その人に良い言葉を伝えます。彼の人生で何が起きているのか、その時、なにが彼の心にあるのか、あなたには決してわかりません。もしかすると、彼は思っているかもしれません。

「私の人生は何も価値がない」  
 「誰も私を愛してくれない」

もしかすると、彼は神の愛を思い出す必要があるのかもしれない。もしかしたら、彼はそのようなことを聞いたことがなくて、知る必要があるのかもしれない。もしかすると、彼はそのような励ましを待っているのかもしれない。そして、あなたがそれかもしれません。あなたにはわかりません。聖書は、第2テモテ4章1節から5節で述べています。



神の御前で、また、生きている人と死んだ人とをさばかれるキリスト・イエスの御前で、その現われとその御国を思って、私はおごそかに命じます。みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりやりなさい。寛容を尽くし、絶えず教えながら、責め、戒め、また勧めなさい。というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、真理から耳をそむけ、空想話にそれて行くような時代になるからです。しかし、あなたは、どのような場合にも慎み、困難に耐え、伝道者として働き、自分の務めを十分に果たしなさい。

(第2テモテ4章1節から5節)

すごくないですか？私たちは男性も女性も、老いも若きも、暗闇から、まばゆいばかりの彼の栄光へと私たちをもたらしてくださった方の偉大な話を伝えるために、召されています。私たちは沈黙してはいけません。私たちは隠れてはいけません。人々は、いかにしてペテロがイエスを否定したかについて考えます。彼は言いました。「私は、その人を知らない」しかし言っておきますが、彼を否定するのに、「私はその人を知らない」と言う必要はありません。「彼を知っている」と言わなければ良いのです。それで、あなたは、すでに彼を否定しています。これは悲しい話です。そこでみなさん全員を励まします。みなさんがどこにいても、職場であれ、家族の中であれ、それが、神があなたに与えた家族です。学校であれ、どこにいてもです。あなたは目的があって、いつの間、そこにいるのです。まさにパウロが、目的があって、一時的にここにいたように。それから良いですか？神はパウロに一度も尋ねませんでした。「なあパウロ。滞在するか？それとも出て行くか？」いいえ。神は彼に言われたのです。「ここに留まりなさい」「あなたがすべきことをする限り、私はあなたの面倒をみよう。時に、それは容易ではないだろう。しかし、あなたは、わたしのわざを行いなさい。あなたは目的があって、一時的にここにいるのだ」

神のみことばを説くことは牧師だけの仕事ではありません。私はいつも言いますが、牧師の仕事は簡単です。彼らは、みことばをすでに知っている人々にみことばを説きます。しかし、最も貴いことは、誰かと一緒に座って、1対1で、あなたが信者になったわけを伝えることです。あなた自身の証は、他の何よりもパワフルです。面白いことに、パウロは説教しないことは競争をムダに走ることだと考えていました。彼は、ガラテヤ人への手紙2章2節で言っています

それは啓示によって上ったのです。そして、異邦人の間で私の<sup>の</sup>宣べている福音を、人々の前に示し、おもだった人々には個人的にそうしました。それは、私が力を尽くしていま走っていること、またすでに走ったことが、むだにならないためでした。(ガラテヤ2章2節)

彼はムダに走ることを恐れていました。福音を分かち合わなければ、この人生は意味がない、と。そこで、ひとつのことをもって、このメッセージを終わりたいと思います。共有することのパワーを、過小評価しないでください。たとえ、たったひとりであっても。その人は、誰よりも偉大な伝道者となって、多くの人をキリストに導くかもしれません。決してわかりません。唯一、私が知っているのは、神が、あなたの人生の道においておられる人々は、あなたが会い、一緒にいて、話し、励ますために、そこにいるのです。反抗も、約束の一部です。詩篇145編を覚えていませんか？あなたを励まし、支えるのは主です。覚えておいてください。神に立ち返りましょう。そうすれば、主があなたを導き、主が、あなたと共にいてくださいます。主があなたを支えてくださり、主がそこにいて、あなたを励ましてくださいます。人ではありません。神です。どうか思い出してください。あなたの町でも、神の民が、たくさんいます。

- 2019年10月12日公開 -



メッセージ by Amir Tsarfati / Behold Israel :<http://beholdisrael.org/>

ビホールドイスラエル 日本語 YouTube チャンネル

<https://www.youtube.com/channel/UCLcuvC6Mr63AqwiiXDkwRVQ>